博士論文(要約)

近代皇族表象の研究

―昭和戦前・戦中・戦後期における直宮イメージを中心に―

茂木 謙之介

本稿は、戦前・戦中・戦後日本における皇族表象の検討を通して、当該期における天皇(制)[1]表象文化の歴史記述を構築するものである。

近現代天皇(制)は近現代の日本を論ずる上で、不可避のテーマであると共に、2000 年代以降のメディアを賑わせた皇位継承問題や 2010 年代の「佳子さまフィーバー」、そして 2016 年 8 月の明仁天皇による退位の意向表明などからも明らかなように、現代にも射程を持ちうる問題系である。

近代天皇(制)をめぐっては、アジア太平洋戦争の終戦直後から、人文学の諸分野において極めて厚い先行論が提示されてきているが、「天皇制」という術語からも明らかであるように、ある程度固定した政治的・社会的「制度」を想定する思考が再生産されてきたとともに、様々のシステムの絡み合った中心としての「天皇」という存在の位置づけと、その当事者の意思が如何なるものであったのかの探求が焦点となってきた傾向が指摘できる。

上記を踏まえ、本稿では問題の所在として以下の三点を挙げる。

第一義的に、昭和戦前・戦中・戦後における近代天皇(制)を体現するものとして皇族表象を位置付け、その形成と展開とを中央および地域社会の双方から明らかにすること。

次に、皇族表象の検討を通じて、戦前戦中期における天皇神格化＝〈現人神〉言説の構造と展開を明らかにすること。

第三に、皇族表象の検討を通じ、戦前・戦中と戦後の天皇(制)の間における連続性と分断の様相を明らかにすること。

考察に際しては同時代の皇族表象をめぐる制度的規範および中央メディアにおける皇族表象を解析すると共に、特に地域社会におけるアジア太平洋戦争の戦前・戦中・戦後の言説に注目して、皇族表象の形成と展開とを考察し、天皇(制)表象研究、さらには天皇(制)研究の新たな展開を拓くことを目指した。

本稿での分析対象は、昭和戦前・戦中・戦後期の中央および地域社会における皇族表象である。

まず、皇族表象なるものについて、その範囲を提示する。

本稿では、戦前・戦中・戦後を通して、時に天皇の〈代理〉として、時に国民の〈代表〉として、諸言説内で〈表象〉される皇族たちを分析対象とし、中でも戦前・戦中・戦後を貫いて、新旧の皇室典範で共に皇族の立場に在り続けた直宮に注目する。

通常「直宮」とは、制度上は天皇の直系親族を隔てなく指すものであるが、本稿では同時代における運用をふまえ、昭和天皇の弟たち（秩父宮雍仁［1902-1954］、高松宮宣仁［1905-1987］、三笠宮崇仁［1915-2016］）を指すものとする。

本稿で直宮に注目する理由は二点挙げられる。一つは皇室内における皇族としてのプライオリティ

---

[1] 天皇を君主と仰ぐ政治・経済・文化の総体を指す用語として「天皇制」はあるが、周知のとおりかかる語彙は党派的な用語として生成してきた背景を持つこともあり、ともすると一つのソリッドな制度を思わせるものである。しかし、本稿でも検討を行うように、〈天皇制〉は天皇を囲繞する様々の表象が積み重ねられる中で、時代状況に合わせて変化を続ける運動体であり、「天皇制」という表記ではその側面が看過される可能性がある。そのため本稿においては「天皇(制)」という表記を採用する。

の高さである。後藤致人によれば、成人した直宮たちは宮中政治における高い発言力を有していたとされ[2]、また直宮自体が天皇との血縁の深さから皇族内の序列が高い認識は当時のメディアにおいても共有されており、彼らを以て皇族という血縁集団を代表させることが可能であると考えられる。また、直宮に注目するもう一つの理由は、前述の通り、戦後においてもなお皇族という身分にとどまり続けたことである。1947 年の 11 宮家の皇籍離脱のあとにも直宮たちは皇籍に残り、メディアへの露出をつづけており、戦前から戦後にかけての皇族表象の検討を行う本稿の試みに最も合致した存在であるということができるだろう。

このような皇族表象を研究することの積極性は、近代天皇（制）研究のアポリアを解消する可能性を持ち得るという点にもある。近代の天皇は、たとえば天皇の発言について、その周囲の人びとの記録等から再構成されるものにとどまっているなど、秘匿される対象となりがちである上、不敬罪をはじめとして、その表現に関しても多くの制約を蒙っていたことは既に知られている通りである[3]。これらは研究上の史料的な制約につながるとともに、研究においても一種の否定神学を惹起するものともいえるだろう。言うなれば、天皇とはなにか、という問い自体に不可能性が存する以上、それへの回答にも不可能性は徹底して残存してしまうのである[4]。かかるブラックボックス化に抗するものとして、具体的史料が充実し、そもそもある程度自由な表現を可能とした、いうなれば期せずして「現れてきてしまう」皇族表象の研究に可能性と意味があると考えられる。近現代の皇室制度のなかで天皇を囲繞する皇族については個別具体的な分析を可能にする余地があるため、ウィトゲンシュタインの顰に倣うわけではないが、そこからいわば天皇(制)の〈輪郭〉を明らかにすることができるのである。

そして本稿の結論ともかかわるものであるが、様々の関係性が結節し、拡散してゆく存在としての皇族を捉えるには、その〈実体〉が何者であるか、その者にいかなる〈意思〉が存在したのかを問う以上に、その表象が如何なるものであったのかを精読・分析することによって導いていくことが最も有効なのである。

もちろん、皇族は生身の人間である。しかし一方で、人びとにとっての皇族はメディアによって提示される表象としての存在であり、もし直接の邂逅があったとしても、そのイメージはすでに日常的に触れている紋切型の表象を基として受け止められる。その上で何らかのイメージの変転が生まれたとしても、それは改めてメディアを通して表象として再提示された際の解釈を変更するものに他ならない。表象が先行し、〈実体〉との出会いも表象によって規定され、新たな表象の更新につながっていくという、まさに表象の集積として皇族はあるといえるのだ。

つづいて〈中央〉および〈地域社会〉という表象生成の場について、本稿におけるその範囲を述べたい。

本稿では、まず法制度と規範的言説によって固定的なイメージの展開する、中央官庁による公文書

---

[2] 後藤致人『昭和天皇と近現代日本』（吉川弘文館、2003）pp.95-97

[3] 渡辺治「天皇制国家の歴史的研究序説」（『社会科学研究』30 巻 5 号、1979）、渡部直己『不敬文学論序説』（大田出版、1999）、小股憲明『明治期不敬罪の研究』（思文閣、2010）等を参照。

[4] かかる問題意識はすでに赤坂憲雄「文庫版解説」（飛鳥井雅道『明治大帝』ちくま学芸文庫、1994）や渡部前掲 1999 などにおいてもその片鱗がうかがえる。

および中央メディアを検討する。特に戦前戦中期は内務省・陸海軍省・宮内省などの中央官庁によって皇族をめぐる表象に規制が設けられ、その規範に従って当該期に極めて広範に展開した中央メディアでの表象は生成されており、それらの分析によってその時代における表現をめぐる制度内の皇族表象を定位することが可能となる。

地域社会に注目して考察を行う理由としては、戦前・戦中・戦後において、皇族表象が実際に展開した地域社会という場に注目することで微視的な視点から個別具体的に明らかにすることができるという点が挙げられる。特に、今回本稿で扱う諸地域は、幕末維新期から明治期中葉において明治政府との間に軋轢を生んだ歴史を持つ地域であり、それらは近代国家の中での「負」の記憶、地域社会における「傷」として扱われるなど、確執を内在させていた[5]。そのような背景とも相俟った政治的・経済的周縁性を負い、「僻地」としての自己認識を有した地域にとって天皇(制)とはいったい如何なるものとして表象され、機能したのか。地域社会の言説に寄り添い、内在する論理を明らかにすることは、まさに固定的な、かつ強力な権力性を持つシステムとしての天皇制という枠組みを再生産してきた従来の研究に変更を迫るものとなり得ようし、それらの諸言説からは、むしろ国民国家論的な先行研究の枠組では説明しきれないような齟齬をも析出することができる。

分析対象となる時期についても、予め所見を述べておきたい。

まず昭和戦前戦中期は、大正末期からの皇室の「民主化」のモードを引き継ぐ時期であると共に[6]、国体論の隆盛とも相俟って[7]、近代日本における天皇の神格化言説が最高潮に達した時期でもあり[8]、それらは同時代における総力戦体制の編成と踵を接していたことが知られているなど[9]、まさに近代天皇(制)の達成が示された時期として考えることができる。中でも、天皇神格化言説の高まりの中で、中央の諸言説では否定されるような、皇族を神として扱う在り様が確認できることは、近代天皇(制)研究において閑却された側面であり、戦前戦中期の天皇(制)理解について変容を迫るものである。また地域社会に注目する本稿の問題意識に照らしたときには、都市とそれ以外の地方の格差の拡大とともに「郷土」への注目がなされる時期でもあり[10]、この潮流との関わりも本稿における論点の一つである。そして、戦後は天皇(制)そのものの大変革期であり、1946 年の天皇の人間宣言、1947 年の 11 宮家の皇籍離脱に代表されるように皇族・皇室のスタイルが大きな変容を蒙った時期である。また、

---

[5] 山口昌男『敗者の精神史』(岩波書店、1995)、河西英道『東北　つくられた異境』(中公新書、2001)を参照。

[6] かかる認識については坂本一登「新しい皇族像を求めて―大正後期の親王と宮中―」(御厨貴ほか編『年報・近代日本研究 20 宮中・皇室と政治』山川出版社、1998)、伊藤之雄、川田稔編『二〇世紀日本の天皇と君主制』(吉川弘文館、2004)、同『昭和天皇と立憲君主制の崩壊　睦仁・嘉仁から裕仁へ』(名古屋大学出版会、2005) 等を参照のこと。

[7] 国体論の展開については桜井進「帝国への欲望――「国体の本義」・「皇国史観」・「大東亜共栄圏」」(『現代思想』29 巻 16 号、2001)、前掲昆野 2008 および長谷川亮一『「皇国史観」という問題　十五年戦争期における文部省の修史事業と思想統制政策』(白澤社発行、現代書館発売、2008) を参照のこと。

[8] 新田均『「現人神」「国家神道」という幻想　「絶対神」を呼び出したのは誰か』(神社新報社、2014［2003］) p.83

[9] 後藤前掲 2003、伊藤前掲 2005 などを参照。

[10] 成田龍一『「故郷」という物語　都市空間の歴史学』(吉川弘文館、1998) pp.20-21

戦後期は地域に根ざした文化運動の展開が知られているが[11]、戦後における地域社会の皇族表象の形成はこの問題とも関係していた。従来の天皇(制)表象研究では、明治維新期や教育勅語、〈御真影〉の成立、戦後「民主」的天皇表象の形成過程など、新たな表象の生成には注目が集められてきたが、その再生産と維持されていく側面には十分に光が当てられてきたとは言いがたく、ベンヤミンの語用に倣うならば法措定暴力に注目が集まる一方で法維持暴力は閑却されてきたといえる。当該時期への注目はこの問題を解決することともなる。

なお、分析対象となるテクストとしては、中央官庁および地域の行政機関による公文書と、中央および地域社会の諸メディア、とくに新聞・総合雑誌・校友会雑誌・記念誌等が挙げられる。

本稿の特色・意義について、三点をあげたい。

ひとつめは、近代天皇(制)研究において等閑視されてきた皇族表象の検討、中でも地域社会におけるイメージの形成と展開を明らかにすることである。

昭和戦前戦中期においては姿を秘匿され、容易に人びとのまえに姿を現すことのなかった天皇が、所謂「空虚な中心」性を多かれ少なかれ保持していたのに対して、皇族たちは往々にして人びとの前にその姿をさらし、常に多様な様相を併せ持っていた。このような皇族の表象からは、戦前から戦後にかけての天皇(制)が不可避的に孕んでいた、ゆるやかに様々のイメージを受け止める、それゆえに一定のかたちに一元的に回収することの極めて困難な〈鵺的システム〉としての側面を明らかにすることができる。

また、二つ目としては、天皇(制)表象研究、天皇神格化に関する研究、戦後天皇(制)研究、皇族研究の各分野に関する先行研究の問題点について、それらの解決をおこなうことが挙げられる。以下、先行する諸研究について、その問題点をあげ、本稿による解決を提示したい。

まず天皇(制)表象研究の代表的なものとしては、古典的名著として〈御真影〉の成立について分析を行った多木浩二の研究[12]、所謂〈視覚的支配〉に注目し行幸啓に注目したタカシ・フジタニ[13]、原武史[14]らの研究、ジェンダー研究の見地から皇后の分析を行った若桑みどり[15]、家族写真の展開と連続性に注目した北原恵の研究[16]、戦前期のメディアにおける天皇表象を扱った右田裕規の研究[17]などを挙げることができる。これらは支配の〈装置〉としての天皇(制)諸表象が〈支配装置〉として果たした政治的機能を明らかにしてきた点において極めて重要なものである一方で、そのなかでは天皇・皇后・皇太子を特権化してきたという共通した問題が挙げられる。いわば諸表象が展開した同時代に

---

[11] 北河賢三『戦後史のなかの生活記録運動――東北農村の青年・女性たち』（岩波書店、2014）等を参照。

[12] 多木浩二『天皇の肖像』（岩波書店、1988）

[13] タカシ・フジタニ『天皇のページェント〔近代日本の歴史的民俗誌から〕』（日本放送協会、1994）

[14] 原武史『可視化された帝国　近代日本の行幸啓』（みすず書房、2001）ほか

[15] 若桑みどり『皇后の肖像　昭憲皇太后の表象と女性の国民化』（筑摩書房、2001）

[16] 北原恵「表象の政治学 正月新聞に見る〈天皇ご一家〉像の形成と表象」（『現代思想』第 29 巻 6 号、2001）ほか

[17] 右田裕規「戦前期「大衆天皇制」の形成過程―近代天皇制における民間マスメディアの機能の再評価―」（『ソシオロジ』 47 巻 2 号、2002）ほか

おける、天皇・皇后・皇太子の特権化という支配的な読みを少なからず再生産してきてしまったと言えよう。天皇(制)表象の分析におけるかかる陥穽についてはすでに北原[18]や千葉慶[19]から指摘がなされており、意識的に取り扱うことが要請されるものであったが、にもかかわらず天皇・皇后・皇太子への偏重の傾向をぬぐい去ることができないのが現状である。本稿では「天皇の藩屏」としての皇族に注目し、皇族表象の単純には理念化されない様相が近代天皇(制)において持つ意味を問うことで、従来の枠組に変革を迫る。

つづいて天皇神格化についての研究としては、天皇の宗教的権威に関して、その根拠とされる儀礼や習俗を通時的に論じる研究である山折哲雄[20]や宮田登[21]の論、明治維新期の近代天皇制形成期に着目し国家形成の問題と関連付けて論じる安丸良夫[22]や八木公生[23]の研究、国家的宗教としての国家神道を論ずる村上重良[24]の研究や、村上を引き受けて国家神道の検討から天皇崇敬の問題に言及した島薗進[25]の論、国家神道の文脈で天皇の宗教的権威を捉えた上で天皇制と近代日本の宗教を各論的に論ずる井上順孝[26]の研究や、昭和期の天皇神格化の過程を分析した新田均[27]の研究などを挙げることができる。これらにおいては、国家神道との関わりを論じつつ天皇の特権化と理念化が図られてきた傾向にあり、いわば天皇を焦点とする天皇崇敬の体系への探求が行われてきたことが指摘できる。本稿では、主に地域社会で前景化する皇族神格化言説の存在を明らかにし、そのメカニズムを考察することで、従来のような理念的な検討になりがちな天皇神格化に関する研究を更新する。

また戦後天皇(制)研究においては、天皇の政治的、社会的立ち位置をめぐって戦前・戦中と戦後の天皇(制)間の関係性を析出する枠組みがこれまでにもいくつか提示されてきている。佐々木隆爾は昭和天皇の連続性を前提に絶対主義的天皇制と象徴天皇制の分断ではなく現代天皇制と捉えるべきと唱えているほか[28]、吉田裕は戦後の政治勢力としての天皇と宮中勢力の在り様を検討しており[29]、後藤致人は天皇の政治行為としての「内奏」の戦前戦後の連続性を描き出している[30]。また近年象徴天皇制研究に関しては、「象徴」の内実を検討する河西秀哉[31]や冨永望[32]の研究の外、戦後巡幸の歴史的

---

18 北原恵「戦後天皇「ご一家」像の創出と公私の再編」(『大阪大学大学院文学研究科紀要』54 巻、2014) p.26
19 千葉慶「戦略としての表象分析—《八紘之基柱》を読むということ—」(『歴史評論』762 号、2013) pp.69-70
20 山折哲雄『天皇の宗教的権威とは何か』(三一書房、1978)
21 宮田登『塙新書 35　生き神信仰　人を神に祀る習俗』(塙書房、1989)
22 安丸良夫『近代天皇像の形成』(岩波書店、1992)
23 八木公生『天皇と日本の近代(上)　憲法と現人神』(講談社現代新書、2001)
24 村上重良『国家神道』(岩波書店、1970)
25 島薗進『国家神道と日本人』(岩波新書、2010)
26 井上順孝「近代天皇制の宗教的権威—宗教と政治のクロスオーバー」(國學院大學編『近代天皇制と宗教的権威』、同朋社、1992)
27 新田前掲 2003［2014］
28 佐々木隆爾『現代天皇制の起源と機能』(昭和出版、1990)
29 吉田裕『昭和天皇の終戦史』(岩波新書、1992)
30 後藤致人『内奏—天皇と政治の近現代』(中公新書、2010)
31 河西秀哉『「象徴天皇」の戦後史』(講談社選書メチエ、2010)
32 冨永望『象徴天皇制の形成と定着』(思文閣出版、2010)

解明を目指す瀬畑源[33]などの諸研究が提示されている。これらは特に戦後の天皇と側近たちの行動を分析することで戦前戦後の関係性を析出しているが、一方でそれらが如何に人びとの前に立ち現れてきたのかという点については十分に論じられているとは言えず、また戦前期天皇制を扱った諸先行研究に立脚するかたちでの検討が中心となっており、実際にテクストをつき合わせた検討は未だ十分とは言えない。本稿では、中央および地域社会メディアにおける皇族の一種の「変わらなさ」を取り出すことで、その連続している側面を明らかにする。この問題意識は、一つには、戦後皇室がなぜ存続したのかという、単純ながらも極めて大きな問いへの回路をもつものともいえるだろう。

また、歴史学を中心とした皇族研究に目を向けたとき、皇族と天皇の関係性や皇族の政治主体としての在り様を析出した小田部雄次の研究や[34]、戦前期の諸イベントにおける皇室ブランドへのコミットメントを論じた古川の研究[35]、高松宮の海軍軍人としての活動を描いた後藤[36]や濱田英毅[37]の研究などでは、政治主体として、また軍人としての皇族の〈実態〉が論じられてきており、政治史・軍事史への偏重という問題がある。まさに表象文化研究の対象としての検討が要請されているといえるだろう[38]。

そして、以上挙げてきた諸先行研究においては地域社会への注目の薄さという共通した問題を挙げることができる。同時代の諸言説が展開していた場である地域社会の諸史料を発掘し、微視的に検討することが求められているのである。

地域社会を見る積極性としては、ほかにも地域の公文書館等に皇族表象の生成に関わる公文書が保存される傾向にあるということが挙げられる。特に戦前戦中期の天皇・皇后・皇室関係のメディア露出をめぐっては、様々の制度的規範が存在したことは知られているが、実際にそれらがどのように運用され、それが実際に展開した諸言説との間にどのような関係性を持ったのかについては史料的な不足も相俟って十分に明らかにされているとは言いがたい。地域社会において作成され保存された公文書の検討はこのような問題に応えるものでもある。

そして、本稿の特色・意義の三点目としては、公文書とメディアにおける皇族関連のテクストを精読し、テクスト解釈を施すことによって、特に戦前戦中期については検閲行為も踏まえつつ、表象の生成過程を読み解くことが挙げられる。戦前・戦中・戦後の皇族表象は言うまでもなく様々の公的規範の中において生成しており、諸規範を前提としたうえで表象を解きほぐし、論ずるためにかかる作業は必須のものであるが、これまでにその試みは十分に為されてこなかった。これは言うなれば表象

---

[33] 瀬畑源「昭和天皇「戦後巡幸」の再検討—一九四五年十一月「終戦奉告行幸」を中心として」(『日本史研究』573 号、2010a)、同「昭和天皇「戦後巡幸」における天皇報道の論理—地方新聞の報道を手がかりとして」(『同時代史研究』第 3 号、2010b) など。

[34] 小田部雄次『皇族』(中公新書、2009)、同『昭和天皇と弟宮』(角川選書、2011)、同『近現代の皇室と皇族』(敬文舎、2013) など。

[35] 古川隆久『皇紀・万博・オリンピック　皇室ブランドと経済発展』(中公新書、1998)

[36] 後藤致人「昭和戦前期の海軍と皇族 ： 高松宮をめぐって」(愛知学院大学『愛知学院大学文学部紀要 Vol.36』、2007)

[37] 濱田英毅「高松宮宣仁親王論 ： 皇族としての終戦工作の行動原理」(学習院大学『学習院史学 Vol.44』、2006)

[38] 数少ない皇族の表象研究としては衣装史の観点から大正期を中心に検討をおこなった青木淳子『近代皇族による西洋文化の受容と消費』(2013 年度東京大学博士論文) などを挙げることができる。

文化研究と実証的な歴史研究の架橋をはかるものであり、表象文化史の可能性を深める試みでもあると言える。

まずⅠ－ⅰでは、宮内庁の宮内公文書館および国立公文書館所蔵の公文書のうち、皇族表象生成に関する史料を検討し、皇族表象生成をめぐる制度的規範と宮内省および文部省、内務省における皇族の位置づけを確認した。かかる文書群においては、国家機関発給の文書以外に地域社会からの申請等も確認され、地域社会から皇族へのまなざしを析出することも可能である。ここでは国家機関の認識において、特権的な天皇とは差異化された存在として皇族という存在があったことを確認することができた。

かかる傾向は戦前戦中期の中央諸メディアにおける皇族表象にも影響を及ぼしていた。

Ⅰ－ⅱにおいては主に中央諸メディアにおける皇族表象について、内務省・宮内省等の規制を経た規範的なものとして検討を加えた。本章では戦後にまで繰り返される特定のパターンを析出することが可能である。

まずⅠ－ⅱ－ⅰでは、当該期の『朝日新聞』『東京朝日新聞』における直宮関連記事を先行論で提示された天皇表象との比較を通しつつ検討した。戦前戦中期の中央紙における皇族表象に関しては、ある程度の類型化が可能である。同節では、これまでに指摘の為されてきた政治的主体としての在り様や軍人としての在り様などの外に、学芸振興や社会事業、福祉事業、産業振興に関わるもの、宮中内存在としての〈家族〉像の提示や儀礼に参加する在り様、国家イベントとの関わりなどを明らかにした。大正末から昭和初期にかけての所謂皇室の「民主化」イメージについては、先行諸論が戦中期には縮退したという共通見解を提示しているが[39]、むしろ皇族表象に焦点を絞って分析を試みるならば、それは天皇特権化の状況下の通奏低音として存続していた。

つづいてⅠ－ⅱ－ⅱではグラフ雑誌『アサヒグラフ』を検討した。戦前から 2000 年代までつづいた同誌からは、継続的な記事の掲載による経年変化が析出可能である。ここでも既出の中央メディアにおける諸様相を確認することは可能であり、雑誌の編集方針との相関を指摘することができる。また、いわば同時代の「文化の担い手」としての皇族像を提示するものを多く確認することもでき、グラフ雑誌というメディアの性格に適合するような主体として、同時に既述の国民生活の多様化に合わせた姿として描かれていた。1931 年以降は、軍事的様相が際立ち、まさに時代状況に適合する在り方が提示されているが、同時代においても前述のような様々の様相は断続的に提示されており、まさに戦中期においてもそれ以前の皇族表象が継続する側面が確認できた。

Ⅰ－ⅱ－ⅲでは、戦前戦中期において史上最大の発行部数を記録した雑誌『家の光』における皇族表象の検討を行った。ここでは、雑誌メディアの特徴である報道記事と特集記事の差異を析出することが可能である。報道記事では、新聞メディアと重なる諸様相が確認できるが、特集記事からは、農村向けの総合雑誌という同誌の性格と隣接させた形での皇族表象の展開を確認できた。

これらのいわば広汎に流布した皇族イメージは、地域社会においてはいかなるものとして展開していたのか。第Ⅰ部の後半はこの点に焦点を絞って検討を行った。

---

[39] 原前掲 2001 や伊藤前掲 2005 を挙げることができる。

まずⅠ－ⅲでは、皇族の地方訪問である「御成」のうち、当該期の宮城県の事例をサンプルとして、地域行政が如何に中央官庁と関わりつつ、皇族の訪問を受け入れたかを天皇・皇后・皇太子の地方訪問である行幸啓と比較しつつ検討した。「御成」はそもそも地域社会と皇族の関わる接点となるイベントであり、皇族に関する言説が生成する一つの磁場となっていた。そこにおいて如何なる制度的な枠組みが設定されていたのかを検討することは、地域社会における皇族表象の生成過程を明らかにするものともなる。「御成」についてまとまった史料体が現存する宮城県公文書館所蔵の県行政関連の公文書を中心に検討を行ったが、当該地域は東北以北の地域を皇族が訪問するに際して必ず通過する場所であり、必ずしも皇族との間に特定の関係性を築いたわけではない地域と言え、地域社会における皇族表象を見る上での一つの基準として扱うことができる。当該期には全 6 回にわたって直宮による「御成」がなされており、その中では地方行政機関の極めて主体的な動きと、「御成」を受け入れる論理を確認することができた。その受け入れの枠組みは緩やかに地域メディアにおける皇族表象に影響を及ぼしていた。

かかる制度的な側面を踏まえた上で、Ⅰ－ⅳでは戦前戦中期の地域社会における諸メディアで展開した皇族表象を問題とした。

ここでは、直宮の中でも諸地域と直接的な関係性を築いた秩父宮雍仁親王をめぐる諸表象を中心に考察を行った。

秩父宮は大正天皇の第二皇子にして、昭和天皇の弟宮に当たる人物であり、現在の天皇である明仁皇太子が 1933 年に誕生するまでは皇位継承順位の最も高い人物であった。また、同時代には軍事・スポーツ等々様々の要素から国民的人気を博し、1931 年の青年将校らによるクーデターである二・二六事件では天皇になりかわる存在としても噂された人物であった[40]。加えて地域社会に目を向けたときには、戦前戦中戦後を通じて多くの表象を確認することの可能な皇族であることも見逃してはならない[41]。

本章では秩父宮に関する地域社会の諸言説の精読を通して、当該期地域社会における天皇神格化言説のメカニズムを明らかにするとともに、それぞれの地域が抱えた問題と皇族表象との関わりを明らかにし、そこから戦前戦中期地域社会における天皇(制)国家の構成を考察した。

Ⅰ－ⅳ－ⅰでは、Ⅰ－ⅲですでに扱った宮城県における皇族「御成」について、地方紙『河北新報』における報道を中心に、地域メディアにおける皇族表象を検討した。中央メディアにおける皇族表象との共通と、複層的に生まれてくる差異を明らかにするとともに、特に当該期の神格化の進展した天皇との対比を試みた。

つづくⅠ－ⅳ－ⅱでは、秩父宮号の元となり、秩父宮の複数回にわたる訪問のある地域である埼玉県秩父地方のメディアで展開した皇族表象の検討を行った。ここでも秩父宮を〈現人神〉天皇と重ねあわせる様相を確認できるとともに、地域の学芸と産業の振興者としても扱われていた。「僻地」と

---

40 内務省「叛乱事件関係流言的言辞調」（松本清張編『二・二六事件＝研究資料Ⅰ』文芸春秋、1976、p.275）には「叛乱事件ニハ秩父宮殿下ガ関係シテ居ラレル」との記述がある。なお、当人は無関係であったという見解が現在の研究における位置づけとなっている。

41 戦後における秩父宮の表象の多さについてはその死を問題化した中島三千男『天皇の代替りと国民』（青木書店、1990）のうち、第三章「戦後史における皇族の葬儀と国民」を参照のこと。

しての自己認識をもつ地域社会にとって、皇室と直接かかわり、その状況を脱する契機という、次節の会津とも近似する諸表象を確認することができた。

Ⅰ－ⅳ－ⅲでは1928年の秩父宮と松平節子（勢津子）の成婚をめぐる、主に福島県会津地方における報道を分析した。皇族の婚姻をめぐる諸表象の展開を明らかにし、地域社会の内部における「朝敵」からの名誉回復のディスクールとその表象としての秩父宮および松平節子（勢津子）の果たした役割を検討した。〈負〉の歴史を背景に持つ人びとの代表が天皇の代理と婚姻することによってそれが〈正〉のベクトルへと切り替わるという極めて興味深い言説状況を明らかにすることができた。

そしてⅠ－ⅳ－ⅳでは、1935年から1年4ヶ月にわたって行われた秩父宮の軍務による弘前在勤をめぐって、青森県域で流通した様々のメディアに登場した秩父宮表象を検討した。具体的には津軽地方の地方紙や中等学校の校友会雑誌、記念誌などを対象とし、滞在前、滞在中、滞在後の諸表象を比較し、皇族表象の生成と展開を考察した。来臨前から域との実体的な関わりを経て、皇族表象の型に変化が生まれることを明らかにした。

また、Ⅰ補章においては、Ⅰ－ⅳ－ⅳにおいて分析した弘前市における秩父宮表象の中でも、特に中等諸学校の『校友会雑誌』において展開したそれを取り上げ、1920年代末の昭和天皇の即位大礼、所謂「御大典」に関する『校友会雑誌』における天皇表象との比較を行った。天皇に関する記述との比較を通して地域社会における皇族表象の特異性が明らかにするとともに、学校文化における天皇(制)表象の位相を解明した。

つづく第Ⅱ部「象徴天皇(制)と変わらざる余白—戦後日本における皇族表象の諸相—」では、戦後（占領中・占領後）における皇族をめぐる表象について、戦前戦中期との連続性と分断とを中心に考察した。分析対象としては、当該期の中央および地域社会の公文書・諸メディアにおける直宮表象を設定し、中央のメディアと地域社会の公文書・諸メディアとの比較および戦前戦中との比較を分析視角として分析・総合を行った。当該時期においては宮内省（府・庁）の公文書から明快な規範意識を取り出すことが困難なため、中央諸官庁における皇族の位置づけについては十分に明らかにすることはできないが、その課題については諸メディアの検討及び地域社会における公文書の検討を以てして各論的に明らかとなった。

まずⅡ－ⅰでは、アジア太平洋戦争の終結する1945年からサンフランシスコ講和条約の締結から一年が経過し、秩父宮が死去する1953年までの占領期・占領後の中央メディアにおける皇族表象について検討した。結論からいえば、ここでは、戦前戦中期から引き継がれる諸様相を多く確認することができた。聊か〈偽史〉的な言い回しとなるが、言うなれば戦後における「象徴天皇」像の要素を戦前戦中期から既に用意していたものとして、皇族表象を位置付けることができるのだ。また、戦後のメディアにおいて皇族表象の絶対的な量が減っていく中で、時代に適合するイメージが提示されて行くが、まさにそれは戦後象徴天皇(制)の姿とも重ね合わせることが可能なものとなる。

Ⅱ－ⅰ－ⅰでは、当該期『朝日新聞』における皇族表象を検討した。ここでの皇族表象には、学芸や産業の振興者等、戦前の諸様相を引継いでいることが指摘できると共に、戦前の、主に地域社会における諸言説で確認されていたような、人びととの親密さがより前景化する情況を見出すことができた。

Ⅱ－ⅰ－ⅱでは、戦後『アサヒグラフ』における皇族表象の検討によって、戦前の「平民的」イメージと隠微に接続した「民主的」イメージが明らかになった。戦前からの雑誌メディアとしての連続性を持った同誌ではまず、戦前と比した時に軍事色の脱色が確認できると共に、戦前から連続する国民生活の〈代表〉としての皇族表象が提示されるとともに、国民生活に密着するような、かつ親しみやすい姿が再度示されていく。

Ⅱ－ⅰ－ⅲでは、当該期の雑誌メディアにおける皇族表象を確認できるものとして、秩父宮による自筆記事を検討した。同時代の特徴としては、それまで間接話法的に言葉を人びとに伝えてきた皇族が自ら筆を執って行う自己表象の成立が挙げられる。将棋・登山など大衆文化との親和性が前景化すると共に、戦前から連続する社会福祉関連の報道が雑誌の種類の増加にも伴って増え、そしてそのなかでは所謂オールド・リベラリストたちの言説と隠微な関係性を取り結びつつ、展開していた。

Ⅱ－ⅰ－ⅳでは、秩父宮を見知っていた内田百閒による小説テクスト「秩父宮殿下に上るの書」（1950 年）を検討した。秩父宮の自筆テクストにおいて不可視化されていた戦前戦中期の諸様相、なかでも皇族の戦争責任を百閒のテクストは決して明示的ではないにせよ暴き立てる可能性を持っていた。

つづくⅡ－ⅱでは、再び地域に目を転じて、戦後期の皇族の地方訪問と地域行政について分析を行った。同章では戦後における宮城県への 5 回にわたる皇族訪問「御成」を事例に、Ⅰ－ⅲで行ったのと同様に県行政関連の公文書を検討し、地域行政が如何に皇族の訪問を受け入れたかを分析することで、戦後地域社会における皇族表象生成の一前提を明らかにした。既述の通り、中央官庁による皇族表象への対応が史料的に確認できない時代にあって、地域の史料はそれを補うものであった。

そのような行政の介在を踏まえた上で、Ⅱ－ⅲでは戦後地域社会における皇族表象として、戦前戦中期について分析を行った諸地域における皇族表象を検討した。なかでも 1953 年 1 月の秩父宮の死に前後して、如何なるイメージが展開されたのかに注目した。当該期においては秩父宮妃へのゆるやかな引継ぎと秩父宮顕彰のモードが確認され、戦前戦中期の地域社会における皇族イメージが強固に残存していくことが看取された。

まず、戦前戦中に引き続き地域社会の一つの水準として宮城県域を検討したⅡ－ⅲ－ⅰでは、前章でも検討を行った宮城県における皇族「御成」について、地方紙『河北新報』の報道を中心に、地域メディアにおける皇族表象を検討した。ここでは、地域社会における戦前期との共通点と差異を析出するとともに、適宜 1947 年 8 月の昭和天皇による東北巡幸との比較を行うことで、戦後地域社会における皇族表象の特徴を明らかにした。

つづくⅡ－ⅲ－ⅱでは、戦後秩父地方における秩父宮死後の顕彰運動について分析を行った。同地では 1953 年の秩父宮の死の直後、地元の神社、自治体、企業、代議士等を中心に秩父宮顕彰の社団法人を立ち上げる。ここでは、秩父宮会の発足経緯、秩父神社における秩父宮祭神化の過程、初期の顕彰運動について、同会所蔵文書および地元紙から分析を行った。ここからは天皇と通底するような神格視と地域振興が共存するという、戦前戦中期における皇族崇敬との回路が確認できるとともに、地域における文化運動との隠微な関係性を剔抉することができた。

Ⅱ－ⅲ－ⅲでは、戦後の会津地方を中心とした福島県域における、秩父宮妃勢津子の訪問と、秩父

宮の死の報道に関する報道について、地方紙や地元出身者向けの雑誌『会津会会報』および地域の公文書などを対象に分析を行った。戦前期に地域における名誉回復と結び付けられて言説を展開していた当該地域において、特に戦前期との比較を行うことで、戦後における皇族表象の意味を問うた。同節では補論として 1995（平成 7）年の秩父宮妃勢津子の死をめぐる諸動向についても目を向け、皇族の死に際して出来する、その皇族とはいったい如何なる存在であったのかという言説を検討した。

そして、Ⅱ－ⅲ－ⅳでは、弘前市を中心とした戦後の青森県域における、秩父宮の死とその後の秩父宮妃の来訪をめぐっての諸表象の検討を行った。ここでは、昭和戦中期の秩父宮滞在中の関係者を中心とした顕彰運動の機運が発生しており、特に地元の名士たちを中心とした関係性の連続とともに、戦前期の記憶の再話が行われていくことが確認できた。

第Ⅰ部では、特に戦前戦中期における皇族表象に関して、表象生成の前提となる諸制度および制度との有機的な連関を持った全国的な皇族表象の分析、「御成」の位置づけ、そして地域社会における皇族表象の諸様相に関して分析を加え、当該時期に高揚した〈現人神〉言説との関連から〈近代日本〉に於ける天皇崇敬を軸とした国民統合の構造を明らかにした。全国的な表象や〈国家意思〉とは離れたところに存する地域社会の〈現人神〉的存在・崇敬対象としての皇族表象は先行研究も触れてこなかった当該時期の天皇崇敬における看過しがたい多様性を明らかにするものであると同時に、そこにおける国民とのつながりの形成は皇族という存在を介して、決して国家機関の狙いと一致することなく、地域社会レヴェルでの天皇(制)システムの再生産・維持をなしていた。特に 1940 年代の〈国家意思〉とは相反する形で継続する〈現人神〉的存在・崇敬対象としての皇族の扱いは、地域社会における自発的な国民統合を起さしめるに際して、決して〈現人神〉天皇の補完的機能にとどまるものではなく、理念化され、神聖化された天皇のもつ「空虚さ」を充満させるものとしても位置づけることが出来たと言えよう。近年の戦前期天皇(制)をめぐるいわゆる「戦前期大衆天皇制」[42]や「リベラル」[43]な天皇が、戦中期にあっては〈現人神〉化していくという見立てを崩すものとして、当該期の地域社会における皇族の「御成」を介した近代の貴種流離の物語は在ったのである。

島薗進はロラン・バルトの『表徴の帝国』の「中心—都市、空虚な中心」を引き、バルトが東京の都市構造から天皇について「空虚な中心」としていることを国家の主軸としての国家神道概念を用いて批判している[44]。だが、本稿で指摘したような、人々からの距離の一定しない皇族という存在を想定したとき、そのような天皇の周辺を時にはアクチュアルなものに、そして時には神聖なるものとして表象する言説があったことは、裏を返せば人びとからより遠く、より高く、その存在を確かめることの叶わないものとして天皇を位置づけることとつながっているとは考えられないだろうか。様々に拡散していく皇族表象の設定というものは『国体の本義』の凡例が示したレトリック「我が国体は高

---

[42] 右田裕規「戦前期「大衆天皇制」の形成過程—近代天皇制における民間マスメディアの機能の再評価—」(『ソシオロジ』 47 巻 2 号、2002)、「祝祭と消費—大正・昭和初期の〈都市的〉な祝祭体験—」（『社会学評論』63、2012）などを参照。

[43] 伊藤之雄『昭和天皇と立憲君主制の崩壊　睦仁・嘉仁から裕仁へ』（名古屋大学出版会、2005）などを参照。

[44] 島薗進『国家神道と日本人』（岩波新書、2010）p.222

遠深遠であつて、本書の叙述がよくその真義を尽くし得ないことを懼れる」[45]とも通底する構造を持っている。いわば皇族とは、その〈近代日本〉の「神聖なる〈無〉」[46]をその様たらしめる、しかも肉体を持った大いなる周辺部なのである。

そして、第Ⅰ部の検討においては皇族に対する期待の地平が如何様に存在していたかもまた明らかとなったといえる。メディアや諸官庁など、様々の主体による期待・欲望を受け止める主体として皇族は在った。換言すれば、それに接する人びとのスタンスを単純化し明確化してしまうものとして皇族は在ったのである。特に近代以降の政治的・経済的・文化的僻地としての自己認識を持った地域、戊辰戦争の〈負〉の記憶をもつ地域において皇族はまさに近代国家との関わりを求めるなかにおける象徴的な存在として希求されていた。まさに近代国家が誕生するに際しての法措定暴力が働いたその場所――それは同時に近代天皇(制)の成立の場と踵を接していたのはいうまでもない――が負った「傷」を癒す装置として働いていたのである。

また戦前戦中期における皇族表象は天皇の代理と国民の代表としての在り様という両義性の間で文脈に応じて様々に拡散していることは本稿において確認されたことであり、とかくスタティックに捉えられがちな天皇(制)システムの在り様に多様な在り様の存した可能性を示すことが出来たと言うことが出来る。その広汎な在り様を示す一例として言及しておきたいのは、戦前戦中期を貫く皇族イメージとして在った福祉事業の推進者としての在り様である。若桑みどりは特に昭憲皇太后を特権化した上で、「女性の統御と支配」を果たした存在として皇后を位置付け、その一つとして福祉事業の指導者としての在り様を指摘しているが[47]、その傍らで皇族は、明確に皇室内におけるジェンダー的役割が分割されたなかにあってそれらを跨ぎ超えるかたちで表象されていたことが指摘できよう。まさに〈現人神〉と国民のはざまにあって、そのどちらにも包摂可能で包摂不可能な存在として皇族とその表象は在ったということができるだろう。

第Ⅱ部においては戦後の中央メディアにおける皇族表象と、地域社会における皇族表象について、それらがそれぞれに戦前戦中期からの連続性の中に在ったことを明らかにした。

より広く皇室に関する表象に視野を開いたとき、戦後の天皇(制)表象において注目すべきなのは二点ある。ひとつは脱軍事化であり、いま一つは天皇の〈皇族化〉である。軍事色の脱色は言うまでもないだろうが、いま一つとして挙げた戦後天皇表象はその殆どを戦前の皇族表象を規範的な型として持つものであった。いわば、戦後における皇族表象の戦前戦中期からの連続性は戦後天皇(制)の連続性をイメージの側面で示すものであるとともに、戦後の「人間」化した天皇表象を支えるための〈原型〉となっていたのである。所謂「天皇服」をめぐる問題などに端的にあらわれているように、戦後の天皇をめぐってはその表象をめぐった闘争が繰り広げられていたことは周知のとおりだが[48]、その着地点として実質的に選び取られたものが戦前・戦中・戦後において極めて変化の少ない皇族であったことは大きな意味を持つものと考えられる。北原恵は天皇家に限定し、「ご一家」の表象をその戦

---

45 「凡例」（文部省『国体の本義』1937）巻頭
46 ロラン・バルト著／宗左近訳『表徴の帝国』（ちくま学芸文庫、1996［初刊 1970］）p.54
47 若桑みどり『皇后の肖像　昭憲皇太后の表象と女性の国民化』（筑摩書房、2001）p.161
48 北原恵「服装の政治学――天皇服という装置」（『女たちの 21 世紀』第 63 号、2010）を参照。

前戦中戦後の天皇(制)における連続性の背景としており[49]、それは十分に首肯できる側面を持ちつつも、所謂「帝室」から「皇室」への変化／不変化を考慮に入れた時、皇族の「変わらなさ」は、より強固なものとしてあったことが指摘できるだろう。「ご一家」を超えた「皇室」の連続性とその無謬性を示す天皇(制)の〈余白〉として皇族表象の一貫性は存していたのである。

そして更にそのような文脈を再び裏切るものとして地域社会における強固な皇族表象の連続はあったと言える。特に秩父宮という地域社会と深くかかわった皇族の記憶を共有するに際して、地域社会では戦前戦中期の記憶について十分に検討を行うことなく再度召喚することによって不在の皇族を表象していた。それは生身の存在として地域社会に来臨する秩父宮妃勢津子にも覆い被せられるものでもあり、これらの連続性は戦前戦中期における皇族表象を、延いてはそれらを通して構築されていた戦前戦中期天皇(制)をメディアの中に生き残らせ、戦後象徴天皇(制)へのなだらかな移行を成立させたということができるのではないだろうか。当該時期において記憶を書き換え、ナショナルな記憶／物語を仮構し、分有するモードが成立していたのである。これは同時に戦前戦中期において展開していた天皇(制)表象の紋切型が如何に強固に働いていたのかを傍証するものともなるだろう。

象徴天皇(制)が抱えた最大の問題が、戦前戦中期における主権者としての天皇の戦争責任に起因する退位問題であったことは疑いないが[50]、それを回避するものとして皇族とそれをめぐる諸表象は在ったということができる[51]。無論、本稿Ⅱ－ⅰ－ⅲ．およびⅡ－ⅰ－ⅳ．で検討した通り、秩父宮の自筆テクストが示す沈黙の外側や、内田百閒のテクストが示す暗示的な批評性はなかったわけではない。だが、それらは決して声高に語られるものではなく、解釈可能性のあわいの中に隠されていた。即ち戦後における天皇(制)の〈危機〉に際して、戦前戦中戦後を通じてイメージの大幅な変更を迫られることのなかった皇族こそが、その〈危機〉を回避し得たのである。

皇族表象は、いわば天皇によっては達成されることの極めて困難だった、換言するならば天皇のみしか存していなければ機能不全となっていた天皇(制)を補綴し、その理念的存在として在った天皇とそれを要件とした天皇(制)を受肉させていた。田中純は天皇について「空虚な象徴性と単なる繁殖能力に二元化されかねない存在として、人権を剥奪された無力さのなかにある」と指摘している[52]。近代以降の天皇(制)は、間違いなくその不確かさの中にあり続けているということができるだろうが、それが〈システム〉として――もちろん偶然も作用している側面は否みがたいが――存し続けることが可能だったのはその天皇個人に不可避的に孕まれる〈危機〉を回避するため[53]、象徴性も繁殖能力も

---

[49] 北原恵「表象の政治学 正月新聞に見る〈天皇ご一家〉像の形成と表象」(『現代思想』第 29 巻 6 号、2001)

[50] 河西秀哉『「象徴天皇」の戦後史』(講談社選書メチエ、2010)、冨永望『昭和天皇退位論のゆくえ』(吉川弘文館、2014)などを参照。

[51] 1945 年段階における天皇退位後の摂政として高松宮が念頭に置かれていたことを考えれば、同時代において特に直宮が戦争責任から免罪されていたことは疑いないといえるだろう。

[52] 田中純『政治の美学　権力と表象』(東京大学出版会、2008) p.218

[53] この天皇(制)をめぐる〈危機〉に例えば松浦寿輝『明治の表象空間』(新潮社、2014)が北一輝に関して指摘するような「国体」をめぐる危機的状況もまた射程に入るものである。すると二・二六事件の際に青年将校達が希求したものが天皇ではなく秩父宮であったことにも一定の理解が及ぶであろう。

強固に持ち合わせておきながら文脈に合わせて極めて柔軟に姿を変えて行く皇族という表象が在ったからなのである。文脈に応じて自在に姿を変え、様々の要請・欲望・期待を受け止めて行く姿は、まさに「鵺的」という形容がふさわしい。そのような〈鵺的システム〉としての天皇(制)を十全に機能させるために必要不可欠なものが皇族表象であったと言い得よう。

制度としての天皇(制)を逸脱しつつ、希求されるものとしての天皇(制)を支え、システムをシステム足らしめるもの。言うなれば皇族表象こそ、戦前戦中戦後を貫く〈鵺的システム〉としての天皇(制)そのものなのである。